30E13-am10

地域社会から学ぶ『いのち』の教育 — 緩和医療教育の構築を目指して —

○串田　一樹[1], 岡　豊香[2], 白石　丈也[3], 海老原　毅[4]([1]昭和薬大, [2]タカノ薬局, [3]けや木薬局, [4]心身障害児総合医療療育センター)

【はじめに】わが国の医療提供体制は急速な少子高齢社会の到来により、制度面から大きな変化を迎えていることから、薬剤師の役割も変わってきた。さらに、最近では緩和医療の分野においても薬剤師の役割が明確になってきた。しかしながら、薬学教育モデル・コアカリキュラム(以下、モデルコアと略する。)は、1466 項目の到達目標で構成されているにもかかわらず、緩和ケアついてはわずか 1 項目だけである。今回、薬学教育における緩和医療教育のあり方について試験的に取り組んだので報告する。

【教育方法】モデルコアで示された教育の他に、地域社会との交流を通して緩和医療に必要な教育の機会をもつこととした。具体的には、お薬講座、障がい児のキャンプ支援、障害児のスポーツ教室支援等を実施することとした。

【結果】緩和医療の教育を推進するにはユニットや学年について横断的な工夫が必要である。初年次教育に始まって、高校生から大学生へ、さらに大学生から薬学生へとキャリアラダーを明確にしたカリキュラムの構築が重要であった。また、地域社会との交流によって得られた機会は、学生の倫理性、社会性、専門性や行動力を育成する貴重な機会となった。

【考察】緩和医療教育は WHO(2002 年)の定義をカリキュラムの根底に位置づけた。それは、患者及び家族の QOL を改善することとあるので、地域社会との交流を通した体験が学生にはかけがえのない機会となった。この活動から学んだことは、「いのちに対する尊厳」であった。そこに自然体で参加できる薬学生がいることは、薬学教育 6 年制の意義が確認できた。